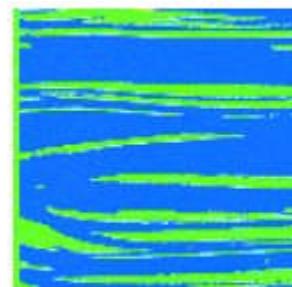


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2011年 秋号 No.64 (2011年11月28日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第29回大会を開催して	飯田成敏
J-ABA2011 大会参加体験記 : 大会に参加して	腰冢由子
J-ABA2011 大会参加体験記 : 貴重な体験の連続だった第29回年次大会学会	庭山和貴
連載 : いま、こんな社会貢献しています (2) 随伴性で、犬と暮らす人々の幸せづくりのお手伝い	山本央子
自主公開講座報告 : 通常学級におけるクラスワイドな支援と個別のニーズへの支援	平澤紀子
自著を語る : 『自閉症児の教育マニュアル』	中野良顯
自著を語る : 『はじめての行動分析学実験—Visual Basic でまなぶ実験プログラミング—	中鹿直樹
編集後記	ニューズレター編集部

日本行動分析学会第29回大会を開催して

飯田 成敏(早稲田大学)

早稲田で行動分析学会を引き受ける話を木村先生から最初に伺ったのは、3年程前でした。その際は、戸山キャンパスが校舎の改築工事に掛かるタイミングと重なっており、そのことを理由に数年待ってもらい、新しいキャンパスで皆様を迎え入れる体制を整えよう、というのが木村先生のお考えでした。しかし、蓋を開けてみれば、東京都からの許可が下りずに肝心の工事が始まらず、キャンパス内も着工準備のままで1年、2年と過ぎ……。漸く工事開始となり、結果、工事の真ただ中に29回年次大会

を引き受けることに。という訳で、大会受付やポスター会場から講演会などで使用した一番広い教室(38号館 AV 教室)への移動は道順がやや分かりづらくなど、大会に参加された方にはご不便をお掛けしたかと思ひ、大変申し訳なく思っております。

大会は9月の18日(日)と19日(月)の連休期間に行い、予約参加者が194名、当日参加が246名の計440名の参加がありました。ポスター発表は85件の発表があり、講演2件、シンポジウムとワークショップは大会企画、学会企画、自

主企画と合わせて7件行われました。2日間の開催期間においては十分な数の企画内容であり、むしろ特に大会2日目はやや詰め込み過ぎ位の日程だったのではないかと考えております。

日程が秋のシルバー・ウィークにあたることや、日本心理学会から連続する日程であったことが、参加人数にどう影響するか予想がつかずに心配していたのですが、結果的には例年をやや上回る数のご参加を頂き、関係者一同ホッとしたのが正直なところでした。大勢の参加があった理由は様々あげられまじょうが、やはり Richerd Malott 先生の招待講演はその中でも特に大きな要因だったように感じます。実際、講演会の会場とした教室は戸山キャンパスでも最大の教室で、収容人数 400 名の教室の席が足りなくなるのではないかとという位に人が溢れていました。また、講演当日は同じ会場で会務総会の後に Malott 先生の講演という日程で、「総会に出ると後の講演会でいい席をとれるよ」と冗談半分に言っていたのですが、総会の終盤は過去の総会にはないくらい的人数が入っていたように思います。改めて Malott 先生の知名度の高さや日本の行動分析学の発展への貢献度の高さがうかがい知れた気がします。

Malott 先生のご招待にあたり、東京成徳大学の中野良顯先生に大変ご尽力いただきました。中野先生は、昨年度まで早稲田大学の文学部および文学研究科で応用行動分析学に関する講義をご担当下さっておりました。中野先生は

Malott 先生と親しい間柄ということもあり、2011年に早稲田での行動分析学会にて Malott 先生をご招待するにあたってご協力いただきました。また、29回年次大会を開催するにあたっては、多くの木村研究室の関係者が準備委員会スタッフとして尽力して下さいました。中には行動分析学会の会員ではないにも関わらず、木村先生が大会委員長ならばと名乗りを挙げスタッフに加わってくださった方もいます。準備委員会の指導当初から参加頂き様々なご助言を下さった人間科学学術院の佐々木和義先生、大会企画シンポジウムに関して取り仕切って下さった東京家政大学の福井至先生の他、日本工業大学の瀧ヶ崎隆司先生には広告や展示関連を、目白大学の野澤孝司先生には講演の先生方との連絡係を、理工学術院の石井裕之先生には大会 HP など IT 関連を、文学部助手の趙善英先生には名簿管理などを、文化構想学部助手の岡林誠士先生には会計をそれぞれ担当頂きました。更には大会前や当日に協力頂いた大勢のスタッフを含め、多くの方の協力があった大会が開催できたと思っております。

大会当日は天候にも恵まれ、多くの方のご支援ご協力もあって大きなトラブルもなく大会を無事終えることができました。私自身も大会運営の進め方などを学ぶことができ、貴重な経験をさせて頂きました。ご参加いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

<J-ABA2011 大会参加体験記>

大会に参加して

腰冢 由子

(駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻)

9月18、19日に早稲田大学で行われた日本行動分析学会第29回年次大会に参加してきました。今回、初めての発表をした体験も含めて大

会中感じたことを、ご報告させていただきます。

大会初日は日差しのとて強い暑い日でした。初めてのポスター発表の準備や緊張感でなかなか

か寝付けなかった所為もあり、地下鉄早稲田の駅から早稲田大学までの短い道りでさえ、かなりの体力を消耗した感がありました。

受付会場に入ると、すでにポスターをパネルに貼っている方、その様子を少し離れた位置から窺うように眺めている方、談笑している方々の姿があり、暑さで忘れかけていた緊張感が再び襲ってきました。

先輩達からアドバイスを受け、試行錯誤で作ったポスターを掲示しながら、ポスターの枚数や位置、デザイン等、他の発表者の方達の内容を拝見し、ここはもっとこうすれば分かり易いのだなと、発表が始まる前から既に学ぶべき点に多々気付きました。

いざ在席時間になり発表を聞きに来る方々で会場内が更に賑わうと、発表を聞きに来て下さった方とのディスカッションでいつの間にか緊張は薄れ、自分では思い付けなかった研究の改善点や指摘等をメモしながら、気付けば次のプログラムが始まる時間に差し掛かっていました。その頃には不思議なもので、もっと多くの方々と意見交流をしたかったと思うほど、充足感に満ちていました。

今大会では Malott 先生の講演や、東日本大震災における支援、そして犬のトレーニングについてなど、二日間に渡りどれも興味深いシンポジウムを拝聴させて頂きました。Malott 先生の

発表では時に爽快な、時に物悲しい音楽が会場内に流れ、スライドも分かり易い工夫が施されていて印象に残るものでしたし、ABA や歴代の分析家の方達についての貴重な話を伺う機会になりました。東日本大震災における支援についてのシンポジウムでは、被災地の状況は勿論、現地での障がいを持つお子さん達やそのご家族の現状について、メディアからでは得られない側面をリアルに知り、改めて自分自身に何が出来るのか、考えさせられる内容でした。そして、ドッグスクール講師の方による強化の原理や三項随伴性の視点を交えた犬のしつけについての話は、私自身も犬を飼っているだけに共感する部分が多々あり、「お手」を正負どちらの強化で教えるのかにより、「お手」をする際の反応が違ふという内容には、確かに！と深く頷きました。

今学会は、行動分析学の幅は常に多岐に広がりつつあるのだということを実感した学会でした。様々な研究が集結する場に一人の発表者として参加できたことを、そしてこれで最後ではなく、次につなげたいと強く感じたことを誇りに思います。

拙い文章になってしまいましたが、最後まで目を通して頂き、有り難うございました。また、このような体験を綴る機会を頂いたことに、深く御礼を申し上げます。

<J-ABA2011 大会参加体験記>

貴重な体験の連続だった第 29 回年次大会

庭山 和貴（関西学院大学大学院文学研究科）

9月18日、19日に早稲田大学戸山キャンパスにて開催された、第29回年次大会に参加させて頂きました。私が行動分析学会へ参加するのは、去年に続いて今回で2回目でした。去年はまだ学部生だったこともあり、ポスター発表やワークショップ、シンポジウムを見てまわるだけだ

ったのに対し、今年はポスター発表もすることができ、様々な貴重な体験が出来ました。拙い文章ではありますが、今大会での体験をご報告致します。

17日夜まで所用で関西のほうにいたため、18日の朝5時頃に自宅を出て東京に向かいました。

自宅の最寄り駅からちょうど4時間で早稲田駅に着き、案内して下さっている方々を頼りに大会会場へと到着しました。初日のポスター発表セッションは、会場が大勢の方々に盛り上がり、白熱した議論があちこちで交わされていました。私自身のポスター発表は2日目だったので、初日は発表者の方々の姿を「翌日の参考にしよう」と思いつつ、主に応用分野のポスターを中心に拝見しました。応用分野の発表は、療育場面における研究を始めとして、行動的コーチングや組織行動マネジメントに分類されるような研究もあり、幅広い場面における研究が発表されていました。行動分析学が多くの場面において役立つことを、改めて実感しました。初日の最後には、Richard W. Malott 先生の招待講演「Dream Chasers」を拝聴しました。Malott 先生の「Dream Chasers」について、学会ならではのお話をお聴きすることができ、非常に感銘を受けました。これまでの行動分析学の発展を本や論文でしか知らない私にとって、その発展が様々な人々によって成し遂げられてきたことを肌で感じさせられるようなご講演でした。

翌日のポスターセッションで発表した私の研究タイトルは「和服の着付けの改善に対する応用行動分析的アプローチ—大学能楽部に所属する男子学生の紋付袴の着付けを対象として—」でした。この研究は、私が学部時代に所属していた能楽部で、1回生を対象とし、応用行動分析の技法を用いて紋付袴の着付けの改善をおこなったものです。研究の結果、着付けの正確さが改善され、さらに正確性だけでなく能楽を觀賞するものから「きれい」と評価されるような着付けができるようになりました。研究から1年たった今では、私の研究を参考にして部員たちが今年度の1回生に着付けを教えています。発表当日は、幸いなことに多くの方々が見に来て下さり、貴重なコメントをたくさん頂くことが出来ました。この場をお借りして感謝申し上げます。この体験記が掲載されるころにはもう終わっているかと思いますが、スペインの

グラナダで開催される ABAl 6th International Conference でも発表する予定ですので、その際には今回頂いたコメントを参考にさせて頂きたいと思います。質疑応答中は、なにぶん2回目の参加だったこともあり、見に来て下さった方々の名札のお名前を拝見しては「あの本(論文)を書かれたあの方だ!」と思って緊張するという事が何度もありました。発表後には、あのような答え方で良かったのだろうかとか、あるいは何か失礼がなかったかなどと心配になりましたが、数々の貴重なコメントを頂いたことはとても嬉しく、良い研究をしてまた是非発表したいと強く思いました。ポスター発表の質疑応答を終えた後には、またシンポジウム等を見てまわりましたが、その中でも特に印象に残ったのが「東日本大震災の障がい児・者支援の状況と課題」です。日ごろから障がい児教育や支援にも関わらせて頂いている身としては、今大会の前から最も関心のあったシンポジウムでした。現地での支援を実践されてきた先生方のお話からは、報道等からでは想像しにくいような支援ニーズもある様子が伺えました。また、障がい児・者支援以外でも、被災地において行動分析学が役立つ場面は多いのではないかと、シンポジウムをお聴きしながら思いました。

今大会に参加して、多くのことを学ぶことができ、非常に楽しかったです。シンポジウムなどで、基礎と応用の研究者が共通の基盤の上に立って議論する光景が見られるのは行動分析学会ならではの、来年からも是非参加したいと思いました。今回は、ポスター発表の経験を積めたことだけでなく、シンポジウムなどで新たな知識を得たり、考えさせられたりする機会が多く、非常に良い経験になりました。大会終了後は、「来年は高知だ!」と思いながら、帰路に着きました。

最後になりましたが、当日お世話になりました方々を始めとして、貴重な体験を与えて下さった皆様に感謝致します。本当にありがとうございました。

<連載：いま、こんな社会貢献しています>

随伴性で、犬と暮らす人々の幸せづくりのお手伝い

山本 央子(ヤマザキ動物専門学校/帝京科学大学)

私が、行動分析学の多大な恩恵を受けながら、家庭犬の3大“問題行動”と呼ばれる「汚い、恐い、うるさい」の問題解決にかかわり始めて20年近くが過ぎました。ただし、私は大学や大学院で行動分析学に関する正規の教育を受けたことはありません。行動分析学徒を自称した事も、自意識もいまだにありません。しかし、私の仕事をご覧になった方や、心理学の背景を持つクライアントから、「その機能分析はどこで習ったのですか？」と、繰り返し問われてきた事は確かです。

ニューヨーク修業時代

私は、13年間の米国ニューヨーク滞在中に犬をASPCA(米国動物虐待防止協会)から引き取った事がきっかけで、当時ASPCAでトレーニング・コンサルタントをしていた恩師Michele Siegel(ニューヨーク市立大学)と出会い、「筋がいい」とおだてられ、家庭犬育成指導の道に踏み込みました(山本, 2007)。

この1990年代初頭のアメリカは、チョークチェーンと呼ばれる犬の首を締め付ける犬具を駆使する正の罰主体の古典的な技法から、クッキー(ごほうび)を駆使する正の強化を主体とした技法への移行期でした。私自身のバイブルも、軍用犬訓練士による「The Koehler Method」(Koehler, 1962)から、「Don't Shoot The Dog」(Pryor, 1985)へと大きく転換しました。師匠に手を引かれ、セミナーからセミナーへ、ワークショップ、キャンプで臨床実践力を磨く一方、乏しい給料をやり繰りして購入した分厚く難解な専門書を読み、新しい知識を得ると、これをいかに臨床現場へ応用するか、夜ごと師匠と激しい議論を戦わせたものです(いつも突然電話が

かかり、その日のセミナーや読んだ文献の解釈など、夜を徹して電話で討論となる。いったん切れてもまたかかってくる、眠らせてくれない師匠からの電話がこわかった)。北米大陸の中でも、ニューヨークは訴訟のメッカであり、法廷闘争を避けるためにも、「汚い(排泄、破壊)、うるさい(吠え)」問題はトレーナー、「恐い(攻撃性)」問題は博士号を持ったbehaviorist(行動学者)の仕事と区別されていました。しかし、トレーナーであっても私の勉強そのものは、排泄、基本的な環境設定にとどまらず、攻撃性、分離不安、情動行動といった複雑な問題にまで及んでいました。

1996年は、私たちBetter way(より良い方法)を模索するトレーナーにとって忘れられない年です。カナダで「The Culture Clash」(Donaldson, 1996)、「Excel-erated Learning」(Reid, 1996)が発刊されるや、トレーナーの間で奪い合い(発売と同時に売り切れ)となりました。Pryor(1985)を読んでも、私を含め殆どのドッグ・トレーナーにとってオペラントの4つの随伴性の意味は不明瞭でしたが、博士号を持つ心理学者であり超愛犬家が著者であるReid(1996)は、「Oh, Positive means adding, Negative means deducting! Now, I see!」と、全米のトレーナーが呟いた一冊です。

また「Readings in Companion Animal Behavior」(Voith & Borchelt, 1996)の出版により、トレーナーたちが学術論文を片手に行動について語るようになりました。この論文集は、オハイオ州立大学心理学部教授David Tuberに捧げる追悼論文集であり、このTuber博士こそ、犬の恐怖症や不安症に対して学習理論による治療を導入し

た、「臨床動物行動学の父」と呼ばれた人物です。Tuber 博士のもとで行動治療を学んだ論文集の二人の編者、Voith 博士は獣医行動学に基づく行動治療、Borchelt 博士は行動分析学に基づく行動治療を確立し、その後、Karen L. Overall 博士や Amy Marder 博士等、現在最先端を走る行動治療の専門家を育てていったのでした。翌1997年には、長らく絶版だった名著「Genetics and the Social Behavior of the Dog」(Scott & Fuller, 1997)が復刻され、「必読書！」と唱われました。私自身も、1998年になると、Behaviorist としてニューヨークを拠点に活躍していた Borchelt 博士の臨床現場に、ストーカーのごとくついて回る機会を得るようになりました。

帰国して

こうして私は、科学者、トレーナー双方の書いた書物やセミナーで膨大な量の最先端の知識と技術を吸収しながら、体重40kgを超える危険犬種から2kgの超小型犬に至る1,000頭近い犬のトレーニングと問題行動の解決を実践し、2001年にペット産業花盛りの日本に帰国、当時、日本で普及し始めていた「しつけ教室」に勤務するようになりました。帰国子女のような私の活動は、犬と暮らす文化の違い、トレーナーの教育土壌の違い、トレーニング方法の違い、何より、トレーニングに対する哲学の違いから、これらの違いが有り難がられる場合もありましたが、異物として拒絶される場合もありました。しつけ教室では、フードを使った誘導や正の強化でおすわりや伏せを教えるはいるものの、飼い主が本当に必要としている「汚い、怖い、うるさい」問題行動の解決が、やがて、私に委ねられるようになりました。私は、「問題」と称される行動が発生している環境の中で、随伴性を分析し、原因の解明と問題の解決を行いました。一頭一頭が暮らす随伴性はそれぞれ異なる訳ですから、見かけは同じ行動でも解決方法は異なります。マニュアル的な解決法を求める同業者は、私の方法に納得する訳がなく、「なぜそういう方法を使うのか？」と問われ続けました

が、当時の私は、その解決法がベストだということが自分ではわかりながらも、行動分析学を正規に体系的に学んでいない私には、それをすっきりと言葉で説明することができなかつたのです。英語と日本語の違いもあったのかもしれませんが、しかし、この問いかけは私に新たな挑戦を与えてくれました。

実践を行動分析学で読み解く

その後、大学や専門学校で教員職について間もない2007年、私は偶然行動分析家の杉山尚子先生に出会いました。そして、杉山(2005)を読んだ時、10数年間実践を通して学んだすべてが、行動分析学の枠組でみごとにすっきりと整理されると同時に、自らの実践を言葉で語るができるようになったのです。その後も、私が実践現場の話をするたびに、杉山先生は「なるほど、なるほど」と頷きながらも、複雑な専門用語の使用を嫌う私に、「避けるな！使いこなさない！」と嫌子を提示し続け、概念はいっそうクリアになりました。同時に、ヒトを対象として書かれた行動分析学の書籍がどれだけ犬の問題解決に通じるかということも知りました(たとえば、奥田・小林,2009)。日本行動分析学会第27回年次大会でのシンポジウム(山本,2009)にお招きいただいた折、それらの成果をお話できましたことをありがたく光栄に存じております。

そしていま

犬は、人を傷つけることができる鋭い牙を持ちながら、人間と同じ空間で暮らすことを許されています。この危険な動物と暮らす指導もサポートも無いままに、人々は愛犬との幸せな暮らしを夢見て子犬を購入します。米国と違い、日本ではしつけ教室に通う人口は極小で、「汚い、怖い、うるさい」問題は飼い始めた瞬間から発生します。私は長い長い道程を経て、現在、指導もサポートもないペット産業のあり方への疑問と、実践家としての自分の活動に対する「なぜそうするのか？」への回答の狭間で、問題予防を目的として、動物看護師や美容を志す学生

の指導へと職域を移行してきました。私の指導の目標は、犬の行動と環境の随伴性を理解して犬を扱い、問題発生の原因を最小限に抑えた環境設定の指導ができる実践家の育成です。

私は科学者ではありません。しかし、科学の恩恵を社会に還元することが私たち実践家の使命だと自負しています。2011年の現在もなお、「専門家の指導」で、体重の1/4もある重い犬具や、電気ショックカラー（首輪）を装着した結果、「攻撃性」と呼ばれる行動の出現に嘆くクライアントが私のもとを訪れます。これらの嫌子から犬と飼い主を解放するためにも、一刻も早く専門家に対し、「行動と環境の随伴性」を理解する教育の普及が急がれます。私は実践家として行動分析学の恩恵を受けながら、一人でも多くの実践家とこの恩恵を分かち合いたいと、あらたに共に学ぶ場を立ち上げました。嫌子から好子へと、幸せの随伴性が広がる事を願いながら。

引用文献

- Koehler, W. R. (1962). *The Koehler Method of Dog Training: Certified Techniques By Movieland's Most Experienced Dog Trainer.* Howell Book House
- Donaldson, J. (1996). *The Culture Clash: A Revolutionary New Way to Understanding the Relationship Between Humans and Domestic Dogs.* James & Kenneth Publishers. (橋根理恵 (訳) (2004) ザ・カルチャークラッシュー ヒト文化とイヌ文化の衝突：動物の学習理論

- と行動科学に基づいたトレーニングのすすめ。レッドハート)
- 奥田健次・小林重雄 (2009) 自閉症児のための明るい療育相談室—親と教師のための楽しいABA講座。学苑社
- Pryor, K. (1985). *Don't Shoot the Dog!: The New Art of Teaching and Training.* Sunshine Books. (河嶋・杉山 (訳) (1998) うまくやるための強化の原理 二瓶社)
- Reid, P. (1996). *Excel-erated Learning: How Dogs Learn and How Best to Teach Them.* James & Kenneth Publishers. (橋根理恵 (訳) (2007) エクセレーティッド・ラーニング—「イヌの学習を加速させる理論」 レッドハート)
- Scott, J. P., & Fuller, J. L. (1998). *Genetics and the Social Behavior of the Dog.* University of Chicago Press.
- 杉山尚子 (2005). 行動分析学入門—ヒトの行動の思いがけない理由— 集英社.
- Voith, V. L., & Borchelt, P. L. (Eds.) (1996). *Readings in Companion Animal Behavior.* Veterinary Learning Systems.
- 山本央子(2007) ヘンリー、人を癒す—心の扉を開けるセラピー犬— ビイグ・ネット・プレス.
- 山本央子(2009) 家庭犬の育成に行動分析学はどのように貢献できるか? 日本行動分析学会第27回年次大会シンポジウム「応用動物行動分析学を知る」 筑波大学.

<自主公開講座報告>

通常学級におけるクラスワイド支援と個別のニーズへの支援

平澤 紀子 (岐阜大学大学院教育学研究科)

日本行動分析学会様のご後援をいただき、みだしの講座を平成23年10月30日(日) 13:00-15:00に、岐阜大学教育学部B107教室で

開催いたしました。教師、保護者、学生等の127名が参加されました。

通常学級における特別支援教育は、当初は特

定の児童に焦点を当てた個別的支援が中心でした。しかしながら、特別支援教育が進められていく中で、多様な教育的ニーズに対応していくためには、学級の全ての児童を対象とした支援を土台として、個のニーズに応じた支援を講じることが重要であるとの認識が広まっています。そこで、今回は、横浜国立大学の関戸英紀先生をお招きし、応用行動分析学からの通常学級におけるアプローチについてご講演をいただきました。米国においては、RTI（Response to Intervention）の三層モデルに基づく学校支援が示されてきています。関戸先生からは、横浜市立太田小学校での実践を基に、日本の小学校に即したモデルをご呈示いただきました。それは、全ての児童が成功するように、学校全体で、①どのように行動すればよいかの行動規範を明確にするスクールスタンダードを策定し、②授業のユニバーサルデザイン化の検討を行います。

その上で、支援の必要な児童の在籍する学級に対して、③クラスワイドな支援から個別の支援を実施するというものです。

その中で、支援を要する学級への目標提示とその強化システム及び集団随伴性の適用など、学級経営を成功に導き、児童相互の支え合いを高める方法論について解説していただきました。さらに、クラスワイドな支援を講じることによって、逸脱行動を示していた児童への個別支援の効果が上がることを、シングルケースデザインによる評価からお示し下さいました。

このような講座がもてましたことに、あらためて感謝申し上げます。岐阜大学教育学部特別支援教育センターでは、毎年、学部公開講座において、行動分析学の最前線をお届けする企画を開催しています。今後とも、会員の皆様のご協力をいただきたく、宜しく願いいたします。

<自著を語る>

イヴァ・ロヴァス著/中野良顯訳『自閉症児の教育マニュアル』

中野 良顯（東京成徳大学大学院）

恩師イヴァ・ロヴァスがUCLAを退職するに当たり、自閉症児とその家族のために、精魂込めて執筆された重要な著作を、ようやく翻訳し上梓することができた。

扉には「このマニュアルを発達に遅れのある子どもとともに生きるすべての親に捧げる。耐えがたい責任を引き受けて苦労を重ねながらも、その生き方はあらゆる親が見習うべき手本となっているから」と記されている。

親と関係者に推奨されているのは、次に示す11の治療指針である（第4章）。

①教える方法を学ぼう。効果的指導法を親も学び日常環境で教える。親が参加すれば、週末や休日でも治療できる。親が早くから関われば、治療的改善を維持・拡大できる。

②改善には時間がかかることを理解しよう。劇的改善を期待し、過度のストレスを与えるな。人間は完璧でなくてもいい。緩やかに進歩する子を尊敬の念をもって受け容れよう。

③罪悪感を乗り越えよう。自閉症の原因は親ではない。そう証明されても罪の意識に苛まれる。痼癪に怯えて逃避を許せば強化してしまう。罪悪感を克服しきちんと教えよう。

④治療チームを作ろう。普通児は目覚めているあいだ学ぶ。自閉症児にも学ぶ機会を与えよう。1対1治療を週40時間提供し学習を支援しよう。アルバイトを雇い仲間を作ろう。

⑤チーム運営を学ぼう。誰も半年は参加できるよう調整しよう。親組織と連絡して、ABAを知っている先輩から学び、新人を紹介してもら

い、治療を持続できるようにしよう。

⑥チームを訓練する方法を学ぼう。全員にマニュアルを読ませ、コンサルタントに相談し、ミーティングで肯定的フィードバックを与え、集団で問題解決に当たるようにしよう。

⑦治療の結果を誤認しないよう気をつけよう。高密度治療で改善するとの情報が飛び交う。指導者には訓練が必要である。幻想に迷わされず、学ぶ子どもに喜びを見いだそう。

⑧高密度行動治療を行うことによって、両親の夫婦仲や他の子どもたちとの関係を壊さないようにしよう。家族の絆が大切である。ときには子どもを忘れる時間もつくりよう。

⑨模倣スキル、身辺自立スキル、言語スキルを習得したら、幼稚園や学校に入れよう。クラス選びのため、地域の学校を調べよう。最適の学校を選び、連携して子育てしよう。

⑩自信と自尊心を持とう。プログラムは成功を最大に失敗を最小にするよう開発されている。親と教師は困難に直面して戦っている。その勇気、思いやり、強さを誇りにしよう。

⑪学習原理の基礎を知ろう。土台はソーランダイク以来の学習原理である。日々の行動にオペラント原理が作用している。学習理論や行動修正や応用行動分析をしっかり学ぼう。

この治療指針に基づいて教えるのは、精選された15の基本プログラムである(図「プログラム・タイムライン」参照)。その一つ一つが、「弁別学習」(第16章)のパラダイムによって、時系列的に、具体的、かつ詳細に、解説されている。記者にとってとくに興味深かったのは、「なぜ自閉症児に模倣とマッチングを教えるか」を論じた章だった(第11章)。模倣の学習には副産物があるという。①模倣できなかった自閉症児に般性模倣を教えると、獲得された模倣能力を利用して、複雑な行動を迅速に教えることができるようになる。②模倣はまた内発的動機づけを生み出す。刺激と刺激のマッチングには、模倣と同様、それ自体に強化子が内在する。模倣するため自他の行動の類似性を観察して類似性に気づくと、類似性が強力な強化子として働くようになる。モデルの行動にマッチすればするほ

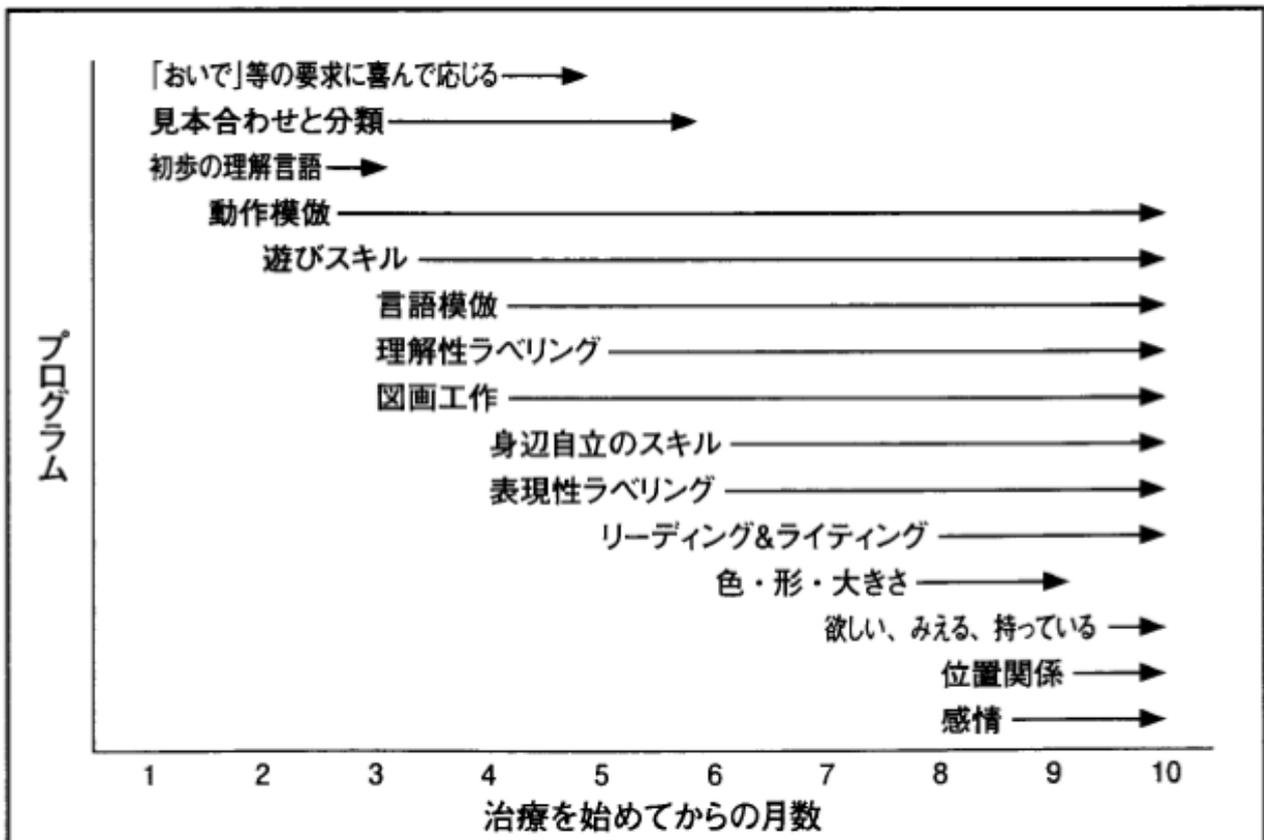


図 プログラム・タイムライン

ど強化は大となり、褒められなくてもその内発的強化子によって学び続けられる。③模倣が動機づけとして働くようになると、治療後も行動が確実に維持される。行動が治療中の外発的強化に依存するなら、治療後の日常生活にも外発的強化子がない限り行動は消えていくが、行動が模倣を基礎にしているなら、強化子が内在するため、治療後も治療的改善が維持されやすい。④同じ年ごろの子どもの行動の模倣を教えると、普通児との統合場面において、大人からの外発的強化に頼ることなく、子ども同士で行動改善を維持させ、成長を促進できるようになる。

マッチングが強化刺激として働くことは、反響言語の観察によって、発見できたという。最初ロヴァスは反響言語を誤って病的行動とみなし、反響言語に社会的強化子を伴わせないようにしてみた。この操作は自傷行動の減少には有効だったが、反響言語の減少には無効だった。社会的強化子の随伴を止めても反響言語は減らなかったのである。そこで反響言語を自己刺激の一つとみなして、自他の声の一致が強化であることに気づいたとき、積年の問題は解決した。反響言語をマッチングとして捉えると、当初はわかっていなかった、自閉症児が型はめやジグ

ソーパズルに没頭する理由も理解できるようになったのである。子どもたちは、他のおもちゃではうまく遊べないのに、型はめやジグソーパズルでは遊べた、と記されている。

本書は「基本的概念」「初歩的な学習の概念」「表現言語」「視覚型学習者に対する方略」「プログラムについての考慮」の6部36章構成、全930頁の大著である。一挙に読み通すことは難しく、章ごとにパワーポイントを作って読み進めているが、何度読み返しても面白さが減ることはない。

私たちは、本書に基づいて、自閉幼児の早期高密度治療5カ年研究を遂行した。その成果として、『改訂新版・こどもの上手な教え方』、『こどもの上手な教え方：課題集』を、NPO法人教育臨床研究機構から出版した。また、現在、DVDマニュアル『こどもの上手な教え方』と『自閉症児の行動分析療法』を製作中である。これらによって本書を補えば、自閉症児の行動分析治療を効果的に実践することができる。

(2011年ダイヤモンド社)

<自著を語る>

『はじめての行動分析学実験

—Visual Basic でまなぶ実験プログラミング—』

中鹿直樹（立命館大学）

このたび日本行動分析学会30周年記念事業の一環として、標記の本を出版いたしました（行動分析学研究アンソロジー2010に続く記念事業の第2弾です）。

この本は、行動分析学に携わるすべての人に向けて、実験を行うことができるような環境整備の目的で企画されました。本書冒頭の「刊行

にあたって」にもあるように、行動分析の実験を実施することは、三項随伴性の各要素の制御に他なりません。すなわち弁別刺激の呈示・反応の検出・反応に応じた結果の操作、の三点です。これらの制御はPCがあれば可能となりますが、ある程度プログラミングの知識が必要となります。これまで行動分析の実験を実施する

ためのプログラミングについて解説した本はほとんどありませんでした。

本書は4章から構成されています。第1章と第2章は、タイトルの「はじめての行動分析学実験」が示すとおり、プログラミングの経験が全くない方に向けて、Visual Basic というプログラミング環境に慣れ、実験で使用する基本的な技能を身につけてもらうことを目的に書かれています。第1章と第2章を読み通していただくと、基本的な強化スケジュールの実験を作成できるようになっていると思います。実際に第1章の前身である原稿を使って学習した大学院生が、プログラムを作成して実験を行い、その内容について先日の学会（日本行動分析学会第29回大会）で発表をしました（大屋ほか、2011「行動変動性に及ぼす間接的なルールの影響」）。

第3章、第4章はそれぞれ見本合わせ、選択行動の実験を行うためのプログラミングについて解説しています。各分野の研究を行っている駒澤大学の桑原先生、大阪市立大学の佐伯先生が実際に研究に使用しているプログラムをもとに解説をしています。これらの章はプログラムの解説であるとともに、それぞれの研究分野の概説にもなっています。これから当該分野の実験をスタートしようという学部生や大学院生には特におすすめです。またある程度プログラミングに慣れている人であれば、ご自分の興味のある章あるいは節を見ていただければすぐにその実験を再現できるでしょう。第3章と第4章は「はじめての…」というタイトルを超えているかもしれません。ぜひデータを収集して、

行動分析学会における学会発表、論文発表へとつなげてください。

本書のタイトルは実験に焦点を当てていますが、内容は応用場面で仕事をなさっている方にも、きっと役に立つことでしょう。たとえば特別支援教育の分野で、対象のお子さんに特化したPC教材や支援ツールを作りたい、というような場合にも本書の内容をアレンジすれば応用可能です。ぜひいろいろな分野の人に読んでいただきたいと思います。

筆者は学部の4年生のころ、卒業論文の実験（ヒトのスケジュール・パフォーマンスがテーマでした）をするにあたり、実験プログラムを初めて作成しました。それ以前にプログラムの経験はありましたが、行動分析の実験をプログラムしたことはありませんでした。ちょうどその頃、ゼミの教授が、他大学の大学院生が実験に使っているスケジュールのプログラムのコードを入手されました。その大学院生に許可をもらってコードを見せていただき、そのコードを参考にして卒論の実験プログラムを作成することができました。今回、本書を執筆・出版することができて、少しですが、何か借りていたものを返すことができたような気がします。この本を読んで実験やプログラミングについて学ばれたどなたかが、また次の世代へと情報を引き継いでもらえると、著者の仕事は完結するような気がします。（2011年ナカニシヤ出版）

編集後記

今号は、第29回大会(早稲田大学)について、事務局長の飯田先生のご報告と、2名の大学院生の方の体験記を掲載させていただきました。

また、連載企画である「いま、こんな社会貢献しています」のコーナーでは、山本先生に、犬のトレーニングに関して、ご自身の行動分析学との出会いも含めてご執筆いただきました。

また、平澤先生からは自主公開講座のご報告

を、さらに中野先生と中鹿先生からは、ご著書の紹介をいただきました。

この秋号で野呂の担当は最後になります。この間、多くの先生方に記事のご執筆をお願いしてきました。本当にありがとうございました。(野呂)。

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで開催します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学障害科学系園山研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
園山 繁樹
E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp